

考えの過程をふきだしに書き 思考を深め、広げる力を育む

千葉県 千葉市立海浜打瀬小学校

以前は、子どもに「答えが合っていればよい」という結果重視の傾向が見られたという千葉市立海浜打瀬小学校。ノートに「ふきだし」を自由に書かせ、教師はそこに表れた思考過程に寄り添いながら授業を進める。子どもが自分たちで考えて学習を進めていくプロセス重視の指導が定着するにつれ、学ぶことの楽しさを実感する姿が見られるようになってきた。

取り組みのねらい

- ・自ら問いを持って学びに向かう力や姿勢を育てる
- ・子ども同士がお互いの考えに関心を持ち、学び合う関係をつくる
- ・算数の本質的な面白さを伝え、もっと楽しく学べるようにする

取り組みの内容

- ・「内言」と「外言」をスパイラルに育てられるよう、授業で体験させたい学習言語を吟味する
- ・学習中の子どもの姿を意欲面から類型化し、目指す姿を共有する
- ・授業中に考えや思いを自由に「ふきだし」に書かせることで、「内言」を表出させる

取り組みの成果

- ・教師や友だちの発する言葉への関心が高まり、かかわり合いが生まれた
- ・間違いや分からないことを素直に表現できるようになった
- ・教師の指導観が変化し、子どもの思考の過程に寄り添う授業づくりが出来るようになった

取り組みのねらい

友だちの意見を聴き、自分の考えを深めていけるように

千葉県立海浜打瀬小学校は、大規模なオフィスビルや高層マンションが建ち並ぶ幕張ベイタウンに2001年に開校した。開発によりさまざまな人が移り住んでできた街のため、地域住民は小中学生とその保護者を中心に、学校が地域づくりの拠点となっている。保護者の教育への関心は高く、子どもの学力は総じて高めた。私立中学校の受験者は半数近くに上り、塾に通う子どもの比率も高い。引地清人校長は子どもの実態をこう話す。

S c h o o l D a t a

◎2001(平成13)年開校。地域の交流や防災の拠点の役割も担い、13年度、文部科学省の防災対策実践モデル校となる。オープンスペースの校舎で子どもたちは積極的に交流している。



校長 引地清人先生

児童数 694人 学級数 23学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒261-0013 千葉県千葉市美浜区打瀬3-3-1

TEL 043-211-3330

URL <http://www.cabinet-cbc.ed.jp/school/es/119/>

公開研究会 未定

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

「愛情をたっぷり注がれて育った素直な子どもが多いです。しかし、エネルギーを発散する場が少なく、保護者や教師から期待されるような子どもを演じているのではないかと思うことがあります」

学習面では、「答えが合っていればよい」という結果重視の子どもの姿勢が気に掛かっていたと、教務主任の杉岡潤先生は話す。

「正解を近道で出すことに重きを置き、友だちの発表や別の解き方にあまり関心を示しませんでした。友だちの意見を聴いて考えを深めていく面白さを知らないようでした」

そうした子どもの傾向には、教師側の要因もあったと考えている。教師は20代、30代の若手が7割を占め、以前は講義形式で知識を与えるような授業も多かったという。

「子どもが授業を大人しく聞いてくれるため、教師は自分が話すことが中心になり、子どもが考えを表現する場を十分に与えていなかったかもしれません。校内研究は、それまでの授業のあり方を十分に振り返るところからのスタートでした」（引地校長）

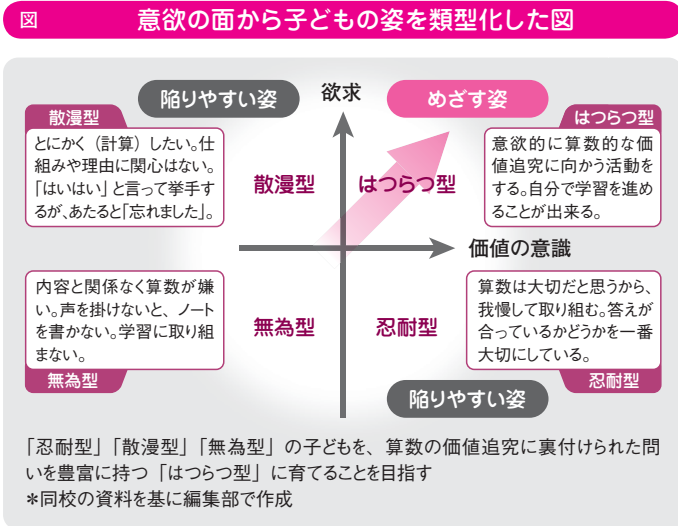
取り組みの内容 意欲的に価値を追求する 「はつらつ型」を目指す

同校は、12年度に千葉市の研究指定を受けたのをきっかけに、「自ら問える子を育てる

算数学習」を研究主題にしている。

「算数は子どもが苦手意識を持ちやすい教科ですが、大切だからと我慢して学ぶ様子も見られます。算数の面白さを伝えることで、もっと楽しく、はつらつと学ぶ姿を引き出したいと考えています。また、算数は論理的に考えを整理して表現しやすい教科です。公式や定義により共通理解が図りやすいため、子どもが考えを分かち合いやすい点にも着目しています」（杉岡先生）

研究では、まず教師間で目指す姿を共有するため、意欲面から子どもの姿を類型化した（図）。低学年は学習への参加意欲は高いが、



千葉市立海浜打瀬小学校校長 引地清人 ひきち・きよと
「先生方が自らを振り返り、その良さを生かしてはつらつと指導できるようにサポートしたい」

千葉市立海浜打瀬小学校 杉岡潤 すぎおか・じゅん
教務主任。「教師はリーダーではなく、間違えたときに示唆する存在。教師も子どもも楽しい教室にしたい」

千葉市立海浜打瀬小学校 大久保桂 おおくぼ・けい
研究主任。6学年担任。「言葉の中心や発し方を工夫して教室を盛り上げ、毎日来たくなる楽しい学校をつくる」

千葉市立海浜打瀬小学校 谷口浩孝 たにぐち・ひろたか
研究副主任。3学年担任。「各教科の楽しさを教師が実感してこそ、子どもにも楽しさが伝わる」

千葉市立海浜打瀬小学校 村瀬方彬 むらせ・まさよし
研究副主任。6学年担任。「子どもの反応を十分に見取り、自由に意見を交し合える雰囲気を大事にしたい」

算数の本質的な価値を実感していない「散漫型」が多く、高学年になると我慢して公式や解き方を暗記する「忍耐型」が増えると分析した。算数の楽しさを実感し、自分で問いを持つて学習を進める「はつらつ型」に育てるためには、結果ではなく過程を大切にした授業を繰り返し経験する中で、算数の価値を感

じ取らせることが重要と考えている。

子どもが考える手掛かりとなる 教師の「外言」を十分に吟味

指導の中心は、「内言」と「外言」をスパイラルに高めていく方法だ。「内言」は思考の手段となる自分自身のための音声のない内的言語、「外言」は意思伝達の手段となる他者に向けられた音声言語と捉えている。

「自ら問いを持ってと言われても、子どもは方法を知りません。与えられた外言を取り込んで内言として思考を深め、それを外言として表現する。こうしたプロセスを繰り返し経験する中で、考えたり問いを持ったりする力が育つと考えています」（杉岡先生）

子どもが授業中に与えられる最も重要な外言は、教師の言葉と考えている。子どもは、教師の言葉を思考の手掛かりとして学びを深めていくからだ。そのため、教材研究では言葉の吟味を徹底している。研究主任の大久保桂先生が説明する。

「授業中に体験させたい学習言語を指導案に記入して授業に臨みます。授業の最後には、子どもが学習言語を内言として獲得している状態を目指します」

授業では、教師は学習言語をすぐには口にせず、子どもから出てくるのを待ったり、子どもの言葉をつないで気付くように促す。研究副主任の谷口浩孝先生が説明する。

「教師が一方的に与えるのではなく、子どもとのやりとりの中で一緒に学びの価値に気付くのが基本姿勢です。まだ完成されていない学習の本質に迫ろうとしている子どもの言葉を、聞き逃さないようにしています」

例えば、3年生の「2位数×1位数」の授業では、「位ごとに分けて計算する」などを体験させたい学習言語に位置付けている。子どもから「位ごと」という言葉が出ずに、「ここを掛ける」などと、自分なりの言葉で言い表している場合には、それを取り上げて皆でじっくりと考えていく。

「従来の授業であれば、1人か2人の発言を取り上げ、『そうですね。位ごとに計算すればよいですね』と先に進んでいたでしょう。それでは、一部の子どもしか本当の意味では理解できておらず、多くの子どもは暗記するだけになります。私たちが目指すのは、表現として洗練された言葉を全員が獲得するまでの過程を大切にする授業です」（引地校長）

獲得した内言を深めるため、高学年になると、振り返りの時間に「この考えは、生活のどんな場面で使えますか」「次に学びたいことは何ですか」などと質問し、自ら問いを持たせるように促している。

「ふきだし」を自由に書かせ 自分の思考に目を向けさせる

内言を深めて外言として表出するために、

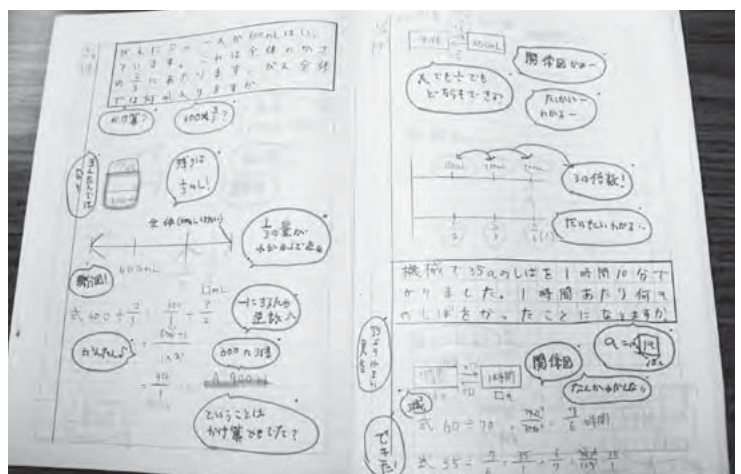


写真 6年生の算数のノート。「なんかわかんない」「できた!」といったつぶやきや、「×でも÷でも、どちらでもできる?」といった疑問がふきだしに書かれている

ノートの余白にふきだしを書いて、考えたことや思ったこと、大事だと思ふことなどを自由に記入させる指導もしている（写真）。

算数の学習に楽しく取り組んでほしいという思いから、ふきだしは「何を書いてOK」と伝えている。当初は「量」を書くことで満足する子どもが多く、「暑い」「眠い」など学習とは無関係の内容も少なくなかった。だが、たくさん書くために教師や友だちの話をよく聞くようになると、次第に教科の本質に迫る内容が増え、「質」が高まっていった。

「ふきだしを始めてから、子ども同士が話

「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動

をよく聞き合うようになり、授業中に飛び交う大切な言葉をキャッチするようになりました。それをふきだしにすることで自分の思考が明らかになり、外言として表すことが上手になってきました」（大久保先生）

教師が授業中に子どもの考えや思いを把握することにもふきだしを活用している。研究副主任の村瀬方彬先生が説明する。

「授業中にノートを見て回り、比較・検討の時間に『Aさんは、こう考えているよ。皆はどう考える？』というように、授業の組み立てに役立てています。また、子どものつまずきも目に見えて分かるので、すぐに指導に生かすことが出来ます」

授業づくりの観点から、「情意」を表すふきだしにも注目している。

「算数の面白さに気付ける授業をすると、『面白い』『楽しい』『不思議だ』といった情意面のふきだしが多く見られます。まるで映画鑑賞後のように、ふきだしに感想が飛び交うような授業を目指しています」（引地校長）

高学年では、担任によって、授業中に自由に立ち歩いて友だちに相談や質問をすることを許可している学級もある。

「子どもによって、『知りたい』『分かりたい』といった知的な欲求が表れるタイミングは異なります。それを、一律に設定された質問タイムまで出さずに我慢することは難しいので、いつでも質問してよいことにしていま

す」（杉岡先生）

子ども同士が相談する際にもふきだしは有効で、同じところに疑問を持つ子どもを組み合わせたり、分かった子とそうでない子を組み合わせたりしている。

取り組みの成果

友だちの考えに関心を持ち かかわり合いが生まれる

発問の吟味やふきだしなど言葉を大切にす
る指導を通じて、子どもが教師や友だちの話
への関心を高めているのは大きな成果と捉え
ている。以前は、個々に学習を進めて周囲と
かかわろうとしない子どもも見られたが、今
では友だちとふきだしを見せ合い、思いやつ
まずきを共有し、学び合う姿が見られるよう
になった。

「間違いや分からないことを素直に書いた
り、話したりできる子どもも増えてきました。
皆で間違いの過程をたどるような姿も見られ
ます」（谷口先生）

算数以外の教科でも自主的にふきだしを活
用し、思考を深めている子どももいる。卒業
生が遊びに来て「中学校でもふきだしを使っ
ているよ」と、うれしそうにノートを見せて
くれたこともあったという。

研究を通して指導観が大きく変化した、と
話す教師は多い。

「以前は、授業中に子どもの反応が悪いの
は、子どもの集中力不足などが要因と考えて
いました。しかし、指導によって、子どもの
反応が全く変わることを目の当たりにしたこ
とで、授業がうまくいかないのは自分の指導
に課題があると捉えるようになりました。事
前の発問の検討や教材研究の大切さを、改め
て感じています」（村瀬先生）

教材研究を充実させる中で、授業のつくり
方も根本的に変わってきた。

「以前は基本的に教科書に沿って教えてい
ましたが、授業で付けた力やキーワードを
踏まえると教科書の流れが必ずしもベストで
はないことがあります。そういう時は、順番
を変えたり、教材を追加したり、教科書では
2時間分の内容を1時間にまとめたりするこ
とがあります」（谷口先生）

14年度は、ふきだしなどから明らかになっ
た子どものつまずきの要因を明らかにし、指
導を見直していくことも重視している。

「表の書き方だけを教えるのではなく、表
にすることの価値を教えることが、本来の教
師の役割と言えるのではないのでしょうか。そ
ういう本質的な指導によって子どもの理解は
深まり、主体的な学習につながるでしょう。
時間を使う場面の見極めは必要ですが、一人
ひとりのふきだしを十分に検討することで、
あるべき授業の姿をもっと追究していきたい
と思います」（引地校長）